

りと家族だけは何とか私の分も生き残っているように祈った。

玉碎する場所と定めた団本部まで何キロ歩いたか、本部についてみると玉碎しないことになっていた。

次の朝、部屋に帰ってみたら、家の中にはもう何ひとつなく、満人がみんな持ち運んで行ってしまった後だった。衣類も食料も台所道具まで一切奪われてしまった。

本島に着の身着のまま、翌年の八月まで人間とは思えないような悲惨な生活だった。苦勞などというものではない。

全員引き挙げとなって帰る途中、チチハルや新京でコレラ伝染病のために数人の友達は亡くなってしまった。

一か月滞在させられて、コロ島から乗船して佐世保の山が見えたとき泣いて喜んだのに、チフス患者がでて二週間も上陸できなかった。この間はとても惨めな気持ちでしたが、その後上陸できて故国日本の土を踏んだ。

楯岡駅について、顔も汚れて黒く、ぼろぼろの着物で楯岡町役場に案内されて食べさせてもらったおにぎりのおいしかったことは忘れることができない。

最後にあんなむごい戦争など二度とないように、亡くなられた友達のご冥福を心からお祈りする。

報国隊員として

山形県 鈴木 喜阿子

私は報国隊の一員として開拓団に食糧増産に励むため渡満した。本当に意義ある日々を送ったのは終戦までの四か月足らずである。

終戦を知ったのは三、四日も後だったと思う。皆泣いた。もう二度と日本へは帰れないし、皆働くことも生きることへの気力も失って、やり場のない悲しみに泣いたのだった。

その上、くる日もくる日も恐怖の毎日でした。昨日の極寒が一夜にして地獄と化したように当時の苦しさは経験した人でなければ分からないだろう。そして多くの団員、また私達の仲間にもその犠牲となって亡くなった方々があった。本当に悲しかった、今でも思い出すこと

に手を合わせてご冥福を祈らずにはいられない。

九月になって八路军とか光復軍とかの進入とともに北満州の天地はようやく治まりかけてきたようだった。

満州の冬は駆け足でくる。開拓団の人々のすべてが布の切れ端まで盗られて、どうしてこの冬を越すのだろうか、と考える余裕もなく一日一日を生きて来た。戸外は零下何十度という厳しい冬、ゴザとコモを被って故郷を思っ一人で泣いた夜を思い出す。

昭和二十一年の春がやって来た。負けては駄目、泣いては駄目と励ますように万物が生長し息吹き始めた頃満州人の家に通った。行けば必ず何かを食べさせてくれるからだ。今でもあのやさしかった爺さんのことを忘れられない。七月になって南下の情報の流れ、皆を喜ばせた。わたしは工藤さん一家の外数人の団員と一緒にチチハルにたどり着いて収容所の関東軍倉庫にはいった。コンクリートの上にアンペラ一枚の生活だが愚痴を言っておられない。生きることだけだった。毎日のように犠牲者が出た。

私はとても悲しい思いもしたが、アンピン餅の売り

子、マータイ修理、洗濯の日雇い等、生きるための仕事をした。

そのうち引き上げの命令が来た。何千人の人が喜びに踊り明かした広場の感激が今も目に浮かぶ。しかしまた人民裁判という生々しい様子を目前に見たのもチチハルの収容所にいたときだった。

約一か月あまりの間に色々な経験をし、苦しみ、楽しさ、恐怖、悲しみ、様々な思い出を抱きながらチチハルを出発した。

一難去ってまた一難の旅である。どこに行っても収容所へ泊まっては南下しコロ島から乗船した。

懐かしい日本の灯を見たときの喜びは忘れられない。あれから四十五年、さまざまな人生行路を経てここまで生きて来た。これからもこの思い出を心の糧として強く生きて行きたいと思っている。